



たすけ心でおつとめを



大教会元旦祭（立教189年1月1日）

真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

これからのをやのたのみハこればかり
ほかなる事わなにもゆハんで 十五号 27
この事をなにをたのむとをもうかな
つとめ一ぢよの事ばかりやで 十五号 28

教祖は、子供をたすけたいとの親心から、よろづたすけの道としておつとめを教えられ、その実行を促されました。しかし、おつとめをすれば、御身上の教祖が拘留されてしまうため、当時の人々はおつとめを勤めることを躊躇（ちゅうちよ）されました。明治20年陰暦正月26日、遂に「命捨てても」との心定めのもと、初代真柱様を芯に白昼堂々とおつとめにかかられました。そのときのおつとめは、鳴物は揃っていませんでしたが、教祖は陽気な鳴物の音を満足気に聞いて、御姿をお隠しになりました。

その後も政府や官憲からの厳しい弾圧、干渉は続き、昭和20年の終戦までは、教祖から教えていただいた通りのおつとめを勤められない時代が長く続きました。おつとめを勤めることができるのは、決して当たり前なことではなかったのです。

私たちの信仰の中心であり、よろづたすけの御守護の元となる大切なおつとめ。このおつとめなくしては、この世に陽気ぐらしは実現しません。私たちも、命懸けでおつとめを勤めてくださった先人に負けないだけの「たすけ心」を込めて、日々、月々のおつとめを勤めさせていただきましょう。

正面方加

昨年の秋季大祭で真柱様は、「つとめたらつとめただけのご守護は現れてくるのであります。また、いましつかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きであります。無駄になることはないのであります」とのお言葉を下された。

年祭活動の3年間、「論達第四号」を拝してより、教祖のひながたを目標に一層の成人を誓い、通り来た道筋は、人それぞれだろうが、つとめたるは必ず自分の足元に芽生えるに違いない。

さて今年は、教祖百四十年祭の年であり、また、次の塚へ向かうスタートの年でもある。年祭活動で培ってきた動きを途切れさせることなく、振り出しに戻ることなく、次に繋げていけるような動きをする年である。年祭活動3年間で培った、おたすけの心をしつかりと継続し、次の塚に向かつてのスタートを切らせていただきたい。

（竹）

《立教188年12月月次祭 挨拶》

おぢばに一手一つの真実の種を 蒔かせていただくころ

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、年祭活動三年千日の仕上げの旬の御用の上に、ひとかたならぬご丹精を頂きまして、大変ご苦勞様でございます。只今は、本年納めの月次祭を滞りなく、共に勇んで勤めさせていただきますまして、誠にありがとうございます。思いますところを少しお話しして、12月月次祭の挨拶にしたいと思います。

今年は年祭活動の3年目ですが、最後の一年を迎えるに当たって、なんとか教祖にご安心いただき、お喜びいただきたいと、各々に成人の心を定めて、この一年を勤めてくださったことだと思います。その成果はさまざまだったと思いますが、精いっぱい勤めたその真実は、親神様、教祖は間違いなくお受け取りくださっています。

今年も今日まで、誠にご苦勞様ございました。これから教祖百四十年祭までのひと月あまりも、共に勇んで通らせていただきますと思います。

さて、今日の神殿講話にもありましたが、私たちは布教活動の一環として、神名流しや路傍講演を行うことがあります。このような外へ向かっての積極的なをいがけの最初は、こかん様の浪

速布教です。

嘉永6年、父親である善兵衛様のお出直しという大節に遭って、涙の乾く暇もなく、教祖の御命によってこかん様は弱冠17歳にして、浪速の地へ神名を流しに出向かれたのです。道頓堀などの繁華街でも、拍子木を打ちながら、にをいがけをされたという話も伝わっています。

ところで、このときの布教でにをいがけ掛かり、信仰の道について人がいるのかと言えば、そんな話は全く聞きません。しかし、このことは何の問題でもないのです。

大切なことは、こかん様が浪速の地で神名を流されたことであり、大阪の地ににをいがけの種を蒔かれたという事実が大切なことです。

それから20年ほどして河内、大阪に道が伝わり、ここ大阪の地で信仰の道が勢いよく伸びていきました。眞明芦津の道も、大阪の地から伸び広がっていったのです。

現在、教会数やようぼく数は、大阪が全教の1割を占めています。全国の都道府県の中では、地元の奈良でもなく、人口が多い首都の東京でもなく、大阪が一番多い。この教勢進展の元は、こかん様が浪速の地に蒔かれたにをいがけの種にあると、私は考えています。

この種に道の初代や先人が肥を置き、丹精を重ねた結果、にをいがけの芽が吹いて、大阪全土にお道のにをいがけ伝わっていったのではないかと、と思えてなりません。眞明芦津の道が伸び広がった元も、こかん様が蒔かれたにをいがけの種にあるのではないかと、

と考えることもできると思うのです。

種を蒔くことは、実に大切なことです。秋季大祭で真柱様は、いましつかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きであります。無駄になることはありません。

と、力強く私たちを激励してくださいました。年祭活動も終盤になって、焦りと迷いの気持ちが起こっては消え、消えては起こる状態であった私にとって、このお言葉はどれほどの励みになり、勇みを与えていただいたか分かりません。

百四十年祭を目指して、私たちが一生懸命に勤めていることは、決して無駄にはならないのです。すべてをこれから先の種として、親神様、教祖が受け取ってくださいなのです。

これから教祖百四十年祭までのひと月余りを、教祖のためにしつかりと勇んで動かしていただきたいのです。そして百四十年祭には、私たちの一手一つの真実の種を、ちば、お屋敷に蒔かせていただきたいと存じます。

どうか皆様方の、年祭活動締めくくりの心勇んだご丹精をお願いしまして、挨拶とさせていただきます。

それでは、今月も参拝場でおさづけの取り次ぎをさせていただきたいと思えます。どうか声を掛け合って、おさづけの取り次ぎをお願い致します。また、添い願ひもおたすけの大切な後押しです。すから、これもお願いしたいと思えます。

どうぞよろしくお願い致します。

(要約)

立教百八十八年 十二月月次祭祭文

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の十全の御守護と深く厚き親心にお護りを頂き、日々恙なく結構にお連れ通り頂きまして、時句の御用に励ませて頂く中に、今日は早くも立教百八十八年の納めの月次祭を勤める日柄と相成りました。

思い返せば、御姿を隠してまでも可愛い我が子の成人を促された教祖の親心にお応えすべく、三年千日と仕切って成人を誓い合い始動した年祭活動も、今年はその締め括りの年として、年頭にお誓いした心定めを仕上げさせて頂くべく懸命に努めて参りました。一同、御存命の教祖にお喜び頂きたい一心から、道の進展の上に微力ながらもお役に立たせて頂きたいと、おたすけと丹精に努めて参りましたが、遅々たる歩みにもかかりませず、温かい親心にお励ましを頂き、日に月に、数々の御守護を頂戴し、節から芽が出る御守護をも頂きまして、今年も恙なくお連れ通り頂きました、言い尽くせぬ御厚恩の程は、思えば誠に勿体無き限りでございます。お許しを頂きました今日の吉日に、役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、十二月の月次祭を執り行わせて頂き、折柄の寒空も厭わず御前に参き集いました芦津の道の子と相共に、この一年に賜りました厚き御恵みに言改めて御礼申し上げたいと存じます。

年が明ければいよいよ教祖百四十年祭を迎えさせていただきます。私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、これからのあとひと月、一段と心を引き締め、勇み心に足並みを揃えて、この大切な旬を最後の一日までの思いで百四十年祭に臨ませて頂く決心でございます。

何卒、大いなる御守護にお導きを頂きまして、悔いなき年祭活動を勤め抜かせて頂き、感激の教祖百四十年祭を勤めさせて頂けますようお願い申し上げます。茲に本年納めの月次祭に当たり、重ねて今年一年の御礼を申し上げ、併せて来年も変わりなくお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《立教188年12月月次祭 神殿講話》

親の声に心を合わせると

不思議な働きを見せていただけ

役員 岩切正義

まず自ら動いた年祭活動

「いつもニコニコ元気いっぱい、陽気ぐらしの天理教です」。これは私の路傍講演の第一声です。年祭活動に入り、勇んで布教をしようとの言葉に決めました。

しかし、元気いっぱいと言っても勇めない日もあります。勇めない日は5分も話せず、言葉がうまく出てこない日もあります。

あるとき、大教会の周辺を戸別訪問に回っていると、50歳くらいの大柄な男性にひどく怒られました。こんなとき、

ひとがなにごといはうとも
かみがみているきをしずめ

四下り目 一ツ

とのお言葉のお陰で、腹が立つの

を押さえることができますし、

いつもわらはれそしられて

めずらしたすけをするほどに

三下り目 五ツ

とのお言葉で、先の楽しみが持てるのす。神名流し、路傍講演、戸別訪問など、お道を知らない方へお話をする「にをいがけ」には、ちよつとした勇氣が必要です。

今回の教祖百四十年祭の年祭活動は、自主的に積極的に動きましよう「動く」ことから始まりました。これは年祭活動に入る前の3年間、コロナ禍の影響でなかなか動けなかったからです。

あちら話しこちら話し、白いものと言つて売つても中開けて黒かったらどうするぞ。

明治32年7月23日

「動きましよう」と言つて、自分が動いてなかったら嘘をついていることになります。まずは自ら動かうと思ひました。

そこで、年祭活動1年目に始めたことは、朝づとめの後のゴミ拾いと、大教会でお願いづとめをしていただいていたので、自教会でもお願いづとめを始めました。そして、月に10回以上路傍講演をしよう決めました。

年祭活動2年目は、ゴミ拾い、路傍講演、お願いづとめに加えて、朝の8時頃、のぼりを立てて、教会前で神名流しをすることにしました。

年祭活動3年目は、教祖百四十年祭だから、月に140人に天理教という言葉を掛けよう決めました。これも自分なりにルールを決めて、街頭でのチラシ配りで「天理教です。読んでください」というやり方ではなく、普段の生活の中で接する方に「天理教」という言葉を掛けることにしました。これをやって改めて気付いたことは、普段の生活の中で、お道の話をするこ

とがほとんどないということです。そこで手つ取り早いのが戸別訪問です。時間と場所にもよりますが、1時間戸別訪問をして、20件くらいは出てこられます。

朝から神殿掃除、朝づとめ、朝づとめの後にゴミ拾い、神名流し。10時くらいに、にをいがけ。そして、午後1時半にお願いづとめと、今年は1日がとても忙しかったです。

親の声を受けて動いたおかげで、今年の秋季大祭での真柱様の神殿講話で、

三年千日の目標達成へ向けて、いまは、一生懸命つとめておられることと思います。つとめたらつとめただけのご守護は現れてくるのであります。

と仰せられました。

年祭活動は神様のお働きが高まっているときです。そのおかげで、ありがたいことに御守護を頂きました。それは現在、自教会で取り組んでいる、こども食堂のことです。



こども食堂は、令和 2 年に私主導で始めました。第 1 回目は、コロナの影響もあり、2 人しか来ませんでした。2 年経って 30 名ほどになりましたが、それ以上は増えませんでした。

私は料理が趣味で、こども食堂で、手打ちラーメンやピザなどを提供していました。参加してくれる子供やその親からは好評でしたので、なぜ人が集まらないのか、足りないものは何なのかを考えたときに、その当時、他の場所で開催にやっているこども食堂は女性主導だと気付いたので、令和 4 年

からは妻に主導権を渡しました。では、妻主導でやると増えたのかというと、そうではありませんでした。相変わらず 30 名程度でした。令和 5 年、年祭活動に入っても増えませんでした。

そんな中、その年の 8 月、大教会の全体会議で大教会長様が、コロナ禍の影響もあったとはいえ、あまりにも動いていなかった現状に対して「もういい加減、動こう」と仰いました。私は、日頃から動いているつもりでしたから、他人事のように受け止めたのですが、妻はそれを真剣に受け止めました。

9 月のこども食堂も同じような参加者でしたので、10 月のこども食堂に向けて妻は、私に「チラシを 50 枚作ってほしい」と言ってきました。チラシを作って妻に渡して、「小学校の校門で配るの?」と聞くと、「校長先生に渡してくる」というのです。私は、「1 宗教団体のこども食堂のチラシを受け取ってくれるわけないだろう」と否定的でした。

でも妻は、チラシを持って小学

校に行きました。しばらくして帰ってきたので「どうだった」と聞くと、「受け取ってくれた」と言うのです。

ここから不思議なことが起き始めました。2 日後、娘が小学校のときのママ友である A さんから、何年かぶりに電話がかかってきました。そのとき、妻が「こども食堂をしているので、手伝ってくれないか」と言いました。A さんは気安く「分かった」と言って、10 月のこども食堂に手伝いに来てくれました。

小学校では、校長先生がそのチラシを全クラスに配っていただいていたので、それまで 30 人位だったのが、一気に 50 人来てくれました。初めて参加する子も多くなりました。

A さんは「主任児童委員」をされています。主任児童委員とは、各小学校の校区に 2 人くらいいて、問題のある家庭、不登校の家庭などを把握して、訪問などをすることがあります。そして、その月のこども食堂に、問題のある家庭の

子供が、食べに来ていました。それを見た A さんは、私に「岩切さん、良いことされてますね」と言い、感激されていました。その日のこども食堂は、スタッフが私と妻、A さんとうい一人地域の方の 4 人でしたので、A さんは「4 人でやっているんですね」と、少ない人数でやっていることに驚き、「来月は、お手伝いを誘ってきます」と言われました。

それから、妻が次の月のこども食堂に向けて、「校長先生に渡すので、チラシを 70 枚作って」と私に言います。私は「先月は校長先生も地域の人が来たから受け取ってくれたけど、学校には他の信仰をしている人もいたり、反対の意見もあるから、今回は無理だと思っよ」と言って渡しましたが、今回も受け取ってもらえました。

11 月のこども食堂は、参加者が 60 人を超え、A さんが、地域の民生委員さんや、もう一人の主任児童委員さんなどのお手伝いの人を 9 人連れてきてくれました。

それから開催するごとに、参加

者がどんどん増えていき、今では100名から150名の参加者が教会に足を運んでくれます。

私の知らないところで勝手に動きだしたように思えました。大した布教はしていなかったけど、御守護を頂いたわけです。これが年祭活動の神様のお働きだなと感じました。

また私だけでなく、妻も暇を見つけてはチラシ配り、戸別訪問をし、支部の奥さん方と一緒に路傍講演もよくやっていました。神名流しは、ショッピングセンターの前で立ち止まっておてふりもしていました。

そして何よりも、事が動きだしたのは、妻が大教会長様の声を受け、「何かしないと」と思い、思い切って校長先生にチラシを持って行ってからです。

今では、毎年小学校の校長先生は変わりますが、引き継ぎで、岩切さんのことも食堂の協力をするように言ってくれています。

そして、今年は、子ども食堂の参加者から8名の子供が「子ども

おちばがえり」に参加してくれました。みんな喜んでくれて、来年も行くと言っています。

教祖が背中を押してくれた

子ども食堂のお手伝いが多くなったことは、とてもありがたいことでしたが、あまり多くても手余りで不足を持たれてもいけませんので、自然と私の出番がだんだんなくなりました。

そんな中、参加者と同じようにご飯を食べていたら、高校1年生の女の子が私の前にきて、「会長さんの美味しいラーメンが食べたいな」と言いました。その言葉が頭から離れず、そこで思いついたのが、教会おとまり会に参加したこのある子に声を掛け、そのときに作った料理を提供する、「会長の美味しい○○食堂」を開催しよう決めました。

コロナ前は、教会おとまり会を月に1回開催していました。当時、お泊まり会には、15〜20名の小学生が参加していました。多いときは、40数名参加していました。し

かし、みんな中学生になったら、部活などで忙しくなり、ぱたっと来なくなります。その子たちにまた来てもらいたいと思って早速、次の月から始めました。

18時に教会に集合して、夕づとめ、よろづよ八首を勤めて、ちょっと話をし、食事をして、簡単なゲームや室内オリピックなどをして20時30分から21時までみんなで遊んでいます。

参加してくれている子は、高校生、大学生、社会人ですが、多くは、子どもおちばがえりに参加したこのある子たちです。おちばの理を戴いたと感じています。

ありがたいことに、今年そのメンバーから2名別席を運んでくれました。また、子ども食堂の日は、そのメンバーがスタッフとして手伝いに来てくれ、本当にありがたいことだと思っています。

親の声に心を合わせて

やはり年祭活動というのは、神様のお働きが高まっているのだなと感じました。こちらが意図しな

いところから動き出したのは、教祖に頑張りなさいと背中を押していただいたように思います。

真柱様が「つとめたらつとめただけの御守護は現れてくる」と言われた通りに御守護を頂いています。これからは、その子たちが何人かだすけに繋がることのできるいかと考えています。

この年祭活動もあとひと月となりました。まだひと月あります。何かまだできることがあるのではないのでしょうか。最後まで今後に繋がるよう活動していただきたいと思っています。

親の声に心を合わせると不思議なお働きを見せていただける。そして、この年祭活動は、親神様のお働きが高まっているので、つとめたらつとめただけの御守護は必ずあります。教祖百四十年祭に向けて最後まで成人の歩みを進めさせていきたいと思います。

今年一年も大教会の上に何かとお力添えを賜りまして、誠にありがとうございました。

十二月月次祭 祭典役割

十二月月次祭		祭典役割	
祭主	扨者	扨者	祭主
大教会長	岩切正教	山田道弘	座りつとめ
指図方	賛者	賛者	前半
井筒文夫	花岡忠和	宗我道明	後半
湯川正罔	伝供	竹内義忠	河端芳雄
立花善三	西本義之	今川聖一	瀧本亘
奥田正儀	奥田正徳	濱田宣郎	岩切孝子
松本さだえ	松森明美	松本さだえ	松森明美
山本義範	河端芳雄	石川健郎	榎川康紀
奥田正儀	湯川正信	榎川康紀	瀧本亘
梶川和人	村田光伸	吉田裕樹	新居里実
望月慶太	山本義彦	金原明幸	佐藤敏幸
山下吉生	松林英也	山本広子	河合ふみ子
木村理恵	梶川文子	吉田幸子	加世田陽子
井筒ちぐさ	宗我邦代	岡島きよの	井筒敏成

立教百八十九年 元旦祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の深く厚き親心と限りなき御守護により、茲に芽出度く立教百八十九年の新春を迎えさせて頂き、一同寿ぎと共に慎んで御礼申し上げます。顧みますれば過ぎし一年、教祖百四十年祭を目指しての三年千日締め括りの年に、論達第四号を指針として、時句の道の歩みの上に努め励んで参りましたが、届かぬばかりの中、おらかな親心にお抱え頂き、数々の御守護を賜りまして、日に月に恙なく成人の道を歩ませて頂きました言い尽くせぬ御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。元旦に当たり、言改めて御厚恩を御礼申し上げ、併せて本年も変わらなきお導きをお願い申し上げます。只今から役目にあずかる者一同、勇み心も一入に、鳴物の調子を揃え、座りつとめ、陽気てをどりを勤めて、今年の初づとめを執り行わせて頂きます。御前には年の明けるのを待ちかねて参らせて頂きました芦津の理の子供たちが、共にお歌を唱和し、同じ思いに伏し拝む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、年改まり教祖百四十年祭の年を迎えて、誠実実を結集して年祭に臨ませて頂き、更には次の成人の塚へ向けて、世界たすけの新たな一步を一手一つに力強く踏み出させて頂く決心でございます。至らぬ私共ではございますが、この上共に変わらぬ親心にお連れ通り頂きまして、たすけ一条に心勇んで励ませて頂き、成人の道を恙なくお導き下さいます、年祭の年に相応しい道の進展と成人の姿をお見せ頂けますよう御守護の程を、年の初めの御礼に併せ、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《婦人会芦津支部総会 記念講演》

教会でおつとめを勤める意義

人をたすける心で 一つになつて

山名大教会長 諸井道隆 先生

しっかりとおつとめしなされ

本日の講話のテーマですが、「教会でおつとめを勤める意義」についてです。このテーマをお受けしたときは、内心「難しいテーマだな」と思いました。なぜかと言うと、「天理教教典」には、「教会でおつとめを勤めることの意義」については書かれていないからです。

ただ、教会のおつとめは、ちばで勤められる「かんろだいのつとめ」の理を頂いて勤めるものである、とだけ教えられています。

もちろんこれが答えなのですが、私は若い頃から、それだけでは自分をおつとめに駆り立てるには、何か物足りないように感じ、心からは納得できなかったのです。その理由として、まず「かぐらづと

めの理」が、よく分かっていなかったこと。かぐらづとめのありがたさ、理合いが分かることで、教会で勤めるおつとめの意義は自ずと分かってくるものです。

ただ、もう一つ思ったのは、「なぜ、おちば以外の場所でおつとめを熱心に勤めなければならぬのか」ということです。若い頃からそうした疑問を持つており、自分なりに探求したところ、一つのヒントを見つけました。

『逸話篇』に199「一つやで」というお話があります。これは、瀕死になった本田せいさんが「生きて出直し」をした話です。

この方は当時、兵庫眞明組の周旋方の筆頭ともいえるおたすけ人でしたが、49歳のときに脹満が悪化し、一命も危ないという容態に

なった。そして、苦しいので、「起こせ」とか、「寝させ」とかい続けた。講元の端田久吉がおちばへ帰り、教祖に事の由を申し上げると、教祖は、

「寝させ起こせは、聞き違いやで。講社から起こせ、ということやで。死ぬのやない。早よう去んで、しっかりとおつとめしなされ。」

と、仰せ下された。そこで急いで神戸へもどり、夜昼六座、三日三夜のお願ひ勤めをしたが、3日目が来てもしるしは見えない。さらに三日三夜のおつとめを勤めたが、ますます悪くなり、6日目からは歯を食いしばってしまい、それから28日間、死人同様に寝通してしまった。28日目の朝に意識が戻って、その後は次第に良くなり、4年後に元通り御守護を頂いた、という話です。

逸話篇の註には、「夜昼六座とは、坐り勤めとてをどり前半・後半の一座を、夜三度昼三度繰り返して勤めるのである。これを三日三夜という」と、このお願ひ勤めに出させて頂く者は、三昼夜ほとんど不

眠不休であった。」とあります。これは当時のお願いづとめの様子で、座りづとめと十二下りのてをどりを一座として、昼に3回、夜に3回、24時間の間に6回勤めてお願ひをされていました。

この逸話で私が注目したのは、教祖が講元に、「早よう去んで、しっかりとおつとめしなされ」と指示されたところですが、瀕死の身上者のおたすけについてご相談に伺った講元に対し、おつとめを勤めてお願ひせよと命じられました。

この当時、どの講社でも熱心におつとめを練習し、勤めていましたが、これはすべて教祖の御指示によって勤められていたという証拠ではないでしょうか。講社時代は、「おつとめを勤めることは、即おたすけ」だったのです。

眞明組のおつとめ

当時の兵庫眞明組のおつとめの様子について、『兵神大教会史』に古老の話が掲載されています。

講元が風呂敷に包んだ赤衣の入った箱を背負い、おたすけ先の家に到着すると、赤衣を部屋の上位



置に奉安した後、まず神様のお話を取り次ぐ。次に水行、お供え物を献饌した後、講元が真ん中に座って、一人で「願ひ奉る、くにとこたちのみこと様、をまたりのみこと様……」と独唱すると、他の者が声を揃えて「なむてんりわうのみこと」と3度唱和して、礼拝。そして、おつとめを勤めました。おつとめが済むと、講元は病人の側へ行つて、赤衣を白木の箱に入れたまま捧げ、「なむてんりわうのみこと」と3度唱和しながら、病人の病んでいる身体の上を、3度撫でるかのように振って祈願しました。

兵庫眞明組の源流は、井筒梅治郎先生を講元にする大阪眞明組で

す。眞明組はとりわけおつとめに熱心で、「眞明の踊り講」と評されていました。

『眞明芦津の道 巻一』を拝読しますと、まずおつとめの人数を揃え、道具を持って病人の家に出かけました。一同水をかぶり身を清め、朝三座、昼三座、夜三座のおつとめを、2日も3日も繰り返されました。中には「自分の寿命を○年縮めて結構ですから、病人をおたすけください」と願われた方もおられました。

当時の先人をそこまで突き動かしたものは何でしょうか？ それは「おたすけの喜び」です。講社でおつとめを勤めることは、即おたすけのためでした。講社時代のおつとめは、不完全なものとして思われがちですが、教祖が直接お仕込みくださって行われていたことであるならば、これが本来の教会で勤めるおつとめの原型、基本形だと、私は思っています。

陽氣づとめとは

私は天理高校出身です。天理高校には「教義科」という授業があ

り、『天理教教典』を基に教えを学ぶのですが、「おつとめとはたすけづとめであり陽氣づとめである」と教えられました。学生時代は、「陽氣に勤めればいいのか。明るくていいな」と思っていました。自教会に帰って参拝していますと、以前の古い神殿は大きな屋根で天井が高いのですが、窓が小さくて非常に暗かったです。そこで先生方が難しい顔をしながらおつとめを勤めている。もちろん、真剣に勤めているからそうなるのですが、学生の私にはそう見えたのです。しかも、当時の節回しは陰旋律で暗かった。暗い神殿で難しい顔をしながら暗いメロディーで歌う。「これのどこが陽氣づとめなんだろう」と、学生の頃、生意気にも思っていました。

そこから、「じゃあ陽氣に勤めるということとは、どういうことなのだろうか」という疑問になったのです。「明るい心でニコニコしながら勤めるのが陽氣に勤めることなのか？ でも笑いながら勤めると気持ち悪いな」などと、ずっと疑問に思っていました。30歳

の頃、ある文章に出会い、目から鱗が落ちる思いがしました。

教祖が御在世中に、教祖の代わりにお話を取り次ぐ「取次」と言われた先生方がおられました。その先生方が教祖から日頃聞いておられるお話を書き残したものが、「こふき」と言われるものです。これには残っているものがいくつもあり、明治16年に書いたものだろうと言われている、通称「こふき十六年本」というものがあります。その中に「陽氣づとめとは」という文章があります。

よふきつとめをしてたすかるというのは、陽氣遊山を見ようとて人間を拵えたる世界なり。よつて元の姿を寄せて、共々勇むるにつき、たすけるものは、ただ、人間はそれを知らずして、人はどうでも、我が身さえよくばよき事と思う心は違ふから、このたびのたすけ教えるは、あしきを払いて、陽氣の心になりて願えば、神の心も人間の心も同じこと故、人間の身の内は神のかしものである故に、人間心を勇めば神も勇んで守護すれば、身

の内あしきことはつとめ一条で、よろづたすけするというは、願ひ人はもちろん、つとめの人衆も真実よりたすけたいとの心を以て願うことなり。

※『こふきの研究』131～132頁参照

3つに分けて説明しますと、まず陽氣づとめをして御守護を現わしてくださるとは、もともと神様が陽氣ぐらしを見たくて人間、世界をお創りくださった。その元の姿がかぐらづとめであり、元初まりの御守護を寄せ、神も人も共に勇んで勤めるから、たすかりの御守護が現れるということです。

2つ目は、陽氣ぐらしが見たくて人間をつくられたという親神様の思召を知らないから、人間は「他人はどうでも、我が身さえ良くば良きこと」と思いがちであるが、その心は違う。このたび神様がたすけ一条の道を教えるからには、あしきをはらい、陽氣の心になつて願ひなさい。「あしき」とは、「我さえ良くば他人はどうでもよい」というその心です。そして陽氣の心になつて願えば、神様は御守護くださる、という話です。

3つ目「身の内あしきことはつとめ一条で、よろづたすけ」とは、「なんとかたすけてください」と願っている人はもちろん、つとめの人衆も真実よりたすけたいとの心をもつて願う。つまり、一緒におつとめを勤める人衆も、真実よりたすけたいとの心をもつて一緒に願つて勤める、その心を受け取つて御守護くださるという意味だと思います。

この中で大事な部分は、「あしきをはろうて、陽氣の心になりて願う」というところです。「あしき」とは、自分さえ良ければ人はどうでも良いという心。それを払つて陽氣の心になる。これは人をたすける心のことです。

「陽氣」と書きますから、陽氣の反対は「陰氣」と想像してしまいが、神様の思召では、陽氣の反対は「あしき」ということがこの文章から汲み取れるわけです。

おつとめを陽氣に勤めるとは、人をたすける心で、皆一つになつて勤める。ここに神様の大事な思召が込められているのではないかと気付いたのです。

それ以後、いつか自分が教会長を御命いただくことがあれば、そういうおつとめを勤めたいと思つていました。36歳で会長の御命を頂いたのですが、「代替わりをする」と、いろいろな節が訪れる」と言われるように、私のときもたくさんの方が身上になられました。

熊本にある直轄教会の会長・T先生は脳梗塞で倒れました。3回目の脳梗塞で、周囲も「もう今度にはダメなんじゃないか」と言っておりました。大教会でも皆が心配しているのですが、山名大教会は静岡にありますが、T先生は倒れた切り、大教会にお見えになることはありませんでした。皆、心配だけれど、「大変だ」かわいそうだ」と言うだけでした。

私たちは毎月、月次祭を勤めておりますが、祭典が始まる前に皆さんに集まっていただき、会長が挨拶をします。そのときに、「神様からは、もともとおつとめを陽氣に勤めるとは、人をたすける心で、皆一つになつて勤めることだと教えていただいています。私たちの仲間が今身上で大変な状態にあつ

て、『大変だね』と言ってるだけではダメですすね。だから今日のおつとめには、とにかくT先生の脳梗塞と半身麻痺の身上が少しでも良くなるように、お願いを添えさせてもらおうじゃないか」と訴えたのです。中には、「若い大教会長が急に何を言い出すんだ」という顔をしている方もいましたが、思い切つて話をして、おつとめを勤めました。

すると、次の月半ばに、その会長の奥さんから「大教会で会長さんがそうやって言ってくださつて、みんなでおつとめを勤めたよつてうちの主人に話したら、顔がほつと明るくなって、嬉しそうな顔をした。本当にありがたかったです」という手紙を頂いたのです。

そこで次の月次祭で、「こういう手紙を頂きました。今月もお願いさせてもらいましょう」と言つて勤めたのです。前の月よりももっと勇んだおつとめを勤めさせてもらいました。そしてまた手紙を頂きました。「リハビリが非常に困難なのですが、本人がリハビリをしたいと言いました。足の感

覚が少し戻ってきたとも言ってお
ります。本当にありがたいです」
と書かれていました。

またそれを月次祭の前に皆さん
にお伝えすると、だんだんその気
になってくださいました。こうい
うやり取りを繰り返しているうち
に、T先生は1年で自力歩行がで
きるようになり、とうとう退院す
ることができ、自教会で祭主とし
て祭文を読み、てをどりができ
るまで回復されました。

おつとめの理は、本当にありが
たいと思いました。身上者がいれ
ば、みなでおつとめを勤めて願
う。これは、講社の時代からずっ
とやってきたことで、当たり前の
ことなのです。それをさせてもら
うと神様は働いてくださるし、教
祖もお導きくださる、ということ
を実感した出来事でした。

おつとめにたすけ心を

また、同じ頃に山形県の教会長
で、臍臓がんになった方がおられ
ました。当時70歳を超えていたの
ですが、もう危ないということ
このお願いも添えさせてもらおう

と私が言い出して、おつとめを勤
めておりました。その上級教会、
上々級教会でも毎月同じようにし
てくださった。間もなく良くなっ
て退院されたのですが、半年後、
残念ながら出直されました。

その会長さんには息子さんがい
て、専修科を出ているのですが、
「天理教は嫌いだ」と言って教会
から出て、東京の方に行ってしまう
った。会長さんは、そのことを非
常に悔やんでおられました。

そして、会長さんが出直されて
1カ月した頃に、その息子さんか
ら私に手紙が届いたのです。天理
教が嫌いだと言って出て行ったの
ですから、ちょっとドキツとしま
した。思い切って開けてみると、
お礼が書いてありました。

息子さんはたびたび東京から山
形にお見舞いに行っていたようで、
「父は苦しんで闘病していました
が、喜んでいました」とありまし
た。大教会をはじめ、上級教会、
みんなが自分のことを神様にお願
いしてくださっていることを喜ん
でいました。「いつも会いに行く
と、それを口にしていました」と

書いてありました。

手紙の続きに「天理教がそんな
宗教だとは知りませんでした」と
書いてありました。私はこちらに
ものすごいショックを受けました。
子供の頃から教会で育って、専修
科まで出ていながら、肝心なこと
が全然伝わっていないかったとい
うことです。

しかし、「今回の父のことで、天
理教は本当に、互い立て合いたす
け合いのできる人たちの集まりだ
ということがよく分かりました。
そういう教えが素晴らしいと思い
ました。だから教会のことは心配
しないでください。僕が必ずやり
ます」と書いてあったのです。そ
れから数年後、教会に帰ってきて、
現在は会長を務めています。

彼は教会に生まれ、専修科で学
びながら、何か大事なことが抜け
落ちてしまっていたのでしょうか。
しかし、おつとめでそれを取り戻
すことができた。ありがたいと思
うのです。

なさけないのよにしゃんしたとも
人をたすける心ないので

十二号 90

これから八月日たのみや一れつわ
心しいかりいれかゑてくれ

十二号 91

この心どふゆう事であるならば
せかいたすける一ちよばかりを

十二号 92

このさきハせかいちうつハ一れつに
よるづたがいいたすけするなら

十二号 93

月日にもその心をばうけとりて
どんなたすけもするともゑよ

十二号 94

世界中の人間は皆「幸せになり
たい。よくなりたい。いい生活が
したい」と思って、いろいろ考え
工夫して文明を作って暮らしてき
たが、神様の目から見たら、「人を
たすける心がないのが情けない」
とおっしゃる。そして、心をしっ
かり入れ替えてほしいと仰せにな
り、神様がとにかく頼むとおし
やるのは、「世界たすける一条の心
になってくれ」ということです。

ここで言う世界とは、それぞれ
の隣にいる人、家族、地域の人、
友達という皆様の周囲の世界であ
り、周りの方々に少しでもたすけ
あってほしい、困っていればたすけ

たい、その心に入れ替えてほしいということ。そうやって人間が万事互いにたすけ合えるようになったならば、神様はその心を受け取って、どんなたすけも現わしてやろうと仰せくださる。

親神様のお望みくださる陽気ぐらしには、私たち一人ひとりが、「自分さえ良ければ、人はどうでもよい」というその心を立て替え、「人をたすける心」にならないと近づかないのです。「あしきをはろうて」と口で唱えながら、心と行動が伴っていないことはないでしょう。おつとめは音程も合って、正しく鳴物と手振りを勤める。そしてお互いが合わせる心で一手一つに勤めることが、非常に大事です。しかし、それと同時に、形の上ではおつとめを一生懸命勤めていても、その魂である「人をたすける心」が入っていないければならないと思うのです。

教会でおつとめを勤める意義

教会で勤めるおつとめは、親神様の御守護を讀えて御礼を申し上げるとともに、「おたすけのための

おつとめ」でなければならぬと思います。そしてこの目的意識を会長だけでなく、会長夫人、役員、ようばく皆が共有して、心一つに勤めることが大切だと思います。

月次祭では会長が祭文を奏上しますが、必ず最後は「謹んでお願い申し上げます」と述べます。これは会長だけのお願ではなくて、教会に繋がる皆さん全員のお願なのです。互い立て合いたすけ合いの陽気ぐらしを、教会という場所、おつとめを通して表していくことで、周囲にも伝わるし、子弟たちにも伝わっていく。そのことをこれから大切にしなければならぬと思うのです。

ところで、教会長になるためには、お運びの前におちばで「任命講習会」を受講しなくてはなりません。その講習会に「教会実務」という講義があり、教会長の日々の務めについて学ぶのですが、そのテキストには、お願いづとめについての項目がありません。

そこで、私が講義を担当したときには、「朝夕のおつとめももちろん大切ですが、肝心なのはお願い

づとめなんですよ」と伝えていきます。それはなぜか。お願いづとめは、芯である教会長が切り出さなければ、なかなか言わないのです。会長が言うから、みんな一緒に勤めよう、となるわけです。ここが非常に重要です。

これは教会とは違う話ですが、修養科の一期講師で男子クラスの担任を務めたことがあります。その中に70歳ぐらいの方で肺がんの末期で余命1カ月と宣告された方がおられました。他にも身上の方はおられましたから、修養科の初日からみなでおさづけを取り次ぎ、お願いづとめをしていたのです。ところが、日に日に容態が悪くなり、車椅子になって、肺がんですから息も苦しく、夜も眠れないう。そして期間の半分ぐらいで帰ってしまわれました。詰所の方が毎日苦しんでいるのが見るに耐えなくて、所属の会長さんに迎えに来てもらったそうです。

途中辞退となって本当に残念だったのですが、クラスのみんなに「その人が生きている限り、われわれが修養科にいる限りは、毎日

その方をお願いづとめをさせてもらおう」と言って、それから1カ月半、毎日続けました。

修養科が終わり、1年ほど経った頃、静岡県内のある支部に講話の御用に行ったのです。会場である教会の客間で待っていますと、面会の方が来られ、見たことのないおじさんが入ってきて、「諸井先生、覚えていますか？」と言うのです。修養科を途中辞退したその方でした。しかもちゃんと立っている。当時は顔がむくんでパンパンだったのが、普通の顔をされていたから、分かりませんでした。

その後の様子を詳しく聞きますと、教会で介護してもらっていたのが、あまりに苦しむので、病院に「もう一度だけ診てもらえないか」とお願いをしたそうです。検査すると、修養科へ行く前より良くなつて、手術ができる状態になつていたので。肺を半分取ったそうですが、「修養科のクラスの皆さんが、毎日お願いづとめを勤めてくださったおかげで、生命を繋いでいただくことができた。そのお礼を言いたくて、駆けつけてき

ました」と言うのです。

みんなに声を掛けて、お願いづとめを続けて本当に良かったと思いましたし、おつとめの御守護は本当にありがたいと思いました。

お願いづとめをしようと声を掛ける人間は、教会では会長がその役目ですが、会長だけではこうした御守護にはなかなか繋がりません。配偶者である教会長夫人、また役員先生方が皆に、「一緒にお願いつとめを勤めさせてもらおう」と声を掛けることによって、こういう姿を見せていただき、教会は賑やかな勇んだ雰囲気になるのではないかと思います。

おつとめは素晴らしいのですが、そこに心が伴っているということが非常に大事だと思います。おつとめに真実の心を込める、真実の心で勤める。そしてご婦人の皆様には、皆に声を掛けて、皆の心をたぐり寄せ、一つにまとめ上げていく役目があります。

これらを大切にしていただきたということをお伝えして、本日の講話とさせていただきます。

(文責 編集部)

訃報

福田荘分教会長(吉野川部属)

谷 正敏さん



令和7年11月10日出直された。
享年89歳。

告別式は11月12日、仁尾智教・三好分教会長斎主のもと、徳島県東みよし町の葬祭場で執り行われた。

昭和10年生まれ。同33年おさづけの理拝戴、同年修養科第203期修了、同40年教人登録、平成24年福田荘五代会長に就任。

井筒敏夫・大教会五代会長の御命で、昭和40年の炊事本部の創設から、長期にわたり勤務された。理に厳しく、おつくしに関して は勇んで運ばれた。また支部の活動にも積極的に参加された。

三馬分教会長(吉野川部属)

喜井三千雄さん



令和7年11月23日出直された。
享年77歳。

告別式は12月13日、山本繁正・白地分教会長斎主のもと、白地分教会で執り行われた。

昭和23年、父・喜井伊太郎、母・はるゑ夫妻の二男として生まれ、山城中学校卒業後、林業に携わりながら信仰を進める。同43年おさづけの理拝戴、同年修養科第322期修了、同48年、15年間無担任であった三馬分教会の四代会長に就任。52年の長きにわたり、その任を全うされた。

平成15年、身上により右半身不随となる中も、上級、上々級へのおつとめ奉仕を欠かすことなく勤め、単身でのおちば婦りの姿は多くの教友への励みとなった。

芦勝分教会長夫人(當別部属)

前田英子さん



令和7年12月3日出直された。
享年85歳。

告別式は12月5日、山田道弘・當別分教会長斎主のもと、北海道帯広市内の葬祭場で執り行われた。昭和16年生まれ。同39年おさづけの理拝戴、同年修養科修了、同46年教人登録。

前田弘文会長と共に単独布教同様の状態だった教会を夫人として支え、ひながたを心の綱として歩み続け、平成27年念願だった教会移転を実現された。
また親の理を重く受け取られ、常に大教会や上級・當別分教会、北勝分教会に真実の限りを尽くされた。



こかん様に続く会

婦人会女子青年

婦人会女子青年（井筒たつえ委員長）は、昨年11月30日、詰所で「こかん様に続く会」を開催した。

はじめに井筒年子・婦人会芦津支部長がお話。「活動の中で教えを学び、真剣におつとめを勤めてほしい」と期待を述べられた。

その後、こかん様についての資料を全員で読んで、ねらい。続いて、11月に開催される女子青年大会について話し合った。

神名流しをして神殿へ向かい、本部のお願いづくめに参

拝。ゴミ拾いひのきしんをしなから詰所へ戻り、昼食は手巻き寿司パーティーで楽しい時間を過ごした。

参加者からは「素直な心で通ることや、人のために尽くす心を養うことの大切さを実感した。日頃から意識して通りたい」などの感想が聞かれた。

参加者は、女子青年6名、担当者5名、計11名であった。

教務部報

教養掛（12月）

主任

竹内 義忠

教養掛

田中 敏行・松森 明美

教人登録

倉岡 マキ（始良）

洪 善和（真明彰化）

立教188年12月4日

教人資格講習会第157回修了

菊池 愛子（大関門）

中澤 京子（大関門）

加藤 雄二（丸芳）

加世田奈津子（大島）

立教188年12月11日

修養科第1012期修了

山下 真輝（島原）

千原 広子（日高）

下笠由美香（大島）

里村美八子（美和名）

當島 大樹（芦大熊）

田中まなみ（芦玉）

西本ひかり（尼崎）

立教188年12月27日

おさづけの理拝戴《11月》

宗像 真帆（芦出水）

岡本 佳紀（周）

小島 和（小松ヶ原）

小島 一哲（小松ヶ原）

〔拝戴日順 4名〕

初席《11月》

〔1名〕有家、日方、薩州、

理風、周宝

〔順序運びより 5名〕

月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年11月30日）

項 目 名 称 () 内教人数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	10	5		
東 津 (13)	2			
吉 野 (23)	4	3	5	
島 川 (29)	7	5	1	
日 原 (16)	9	9	4	
稗 島 (15)	5	5		
本 津 (7)		2		1
日 高 (2)				
始 良 (5)	1	1		
津 和 (12)	2			
門 司 (6)	4	4		1
當 別 (6)	2			
大 島 (26)	11	7	7	
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)	1	1	1	
四 ツ 山 (5)	3	3		
大 冠 (2)				
島 下 山 (3)				
天 保 (1)				
青 浪 (1)				
芦 邊 (1)	1	2		
甲 華 (1)		1		
芦 津 (1)				
天 入 (1)	1	1	1	
豊 野 (1)	2			
紀 周 (3)	4	3	2	1
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫 眞洲 (2)				
芦 ノ 郷 (1)			1	1
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)		1	1	
芦 東 (1)				1
和 鎮 (3)	1	2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	3	1	2	2
眞明彰化 (2)	10	1	2	
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	83	57	27	7

3/29 わかぎの集い

午前10時開講 対象：わかぎ（中学生）

3/30 第54回少年会芦津団総会

午前10時開会 対象：少年会員

※どちらも大教会で行われます。

※教会に配布の要項をご参照いただき、ぜひご参加ください。